

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 松井 広志

【所属】(助成決定時) 大阪市立大学大学院 都市文化研究センター ドクター研究員

【研究題目】 戦時下における少年文化の形成過程の解明  
—模型航空教育を中心に—

## 【研究の目的】(400字程度)

現在、文化社会学やメディア論、海外での日本研究といった分野では、アニメやマンガなどの日本のポピュラー文化への注目が高まっている。しかし、そこでは戦前と戦後の文化が分離して捉えられる問題がある。

そこで本研究では、総力戦体制期に積極的に推進された「模型製作」という領域を対象として、戦時下の少年文化の形成を実証的に明らかにしていく。日本のポピュラー文化の特徴のひとつとして「ミリタリズム的要素」が指摘されることがあるが、この起源は戦後におけるプラモデルブームや戦記物のマンガではなく、さらに遡った戦時下における模型航空の製作にあるのではないかと考えられる。本研究は、戦時下の模型航空教育とその受容の分析から、戦前/戦後のメディア文化の連続性を捉えることを目指した。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

戦中期の日本では航空機の軍事的重要性が認識されるとともに、身体的・実践(実戦)的な軍事教育として模型製作が導入されることになった。1939年には尋常小学校と高等小学校の正課として模型飛行機の製作が採用され、1941年創設の国民学校ではさらに多くの時間を使って「模型航空教育」が実施されていた。模型教育は当時「少国民」と呼ばれた少年たちの文化形成にきわめて重要な契機であったと考えられるが、その実態を捉えた研究はない。本研究では、以下の2つの分析方法を用いることで、模型製作をめぐる少年文化の実態を明らかにすることを試みた。

## (1) 文献資料の分析

戦時下の模型製作に関する文献資料を網羅的に収集し、精読した。まず、1940年代初頭の紙不足のなか、創刊された2つの模型雑誌の分析を行った。ひとつは、『模型』(日光書院)である。この雑誌は、模型教育を支援する目的から、文部省内の組織である模型教育研究会の主導で創刊された。もうひとつは、『模型航空』(東京日日新聞社・大阪毎日新聞社)である。新聞社は当時のマスメディアの中心であり、そこから同誌の影響力の大きさが推測される。さらに、『兵器模型』(1942)など、当時の模型工作書の分析も行った。これらの資料の分析から、模型航空教育の制度の詳細や、兵器模型という独特の概念の内実が明らかになった。

## (2) 聞き取り調査

戦中期における模型教育を実際に受けた経験者へのインタビュー調査を実施した。対象者は1920年代後半生まれで、現在80歳以上の方々である。具体的なインフォーマントは、東京・大阪・名古屋・札幌などに在住の男性、合計5名となった。戦時下の模型教育の経験者のご高齢のため、健康に配慮した対応を行うことに留意した(長時間のインタビューを一気に行なうのではなく、複数回訪ねて、短時間の聞き取りを少しずつ分けて行うなど)。分析にあたっては、人間行動を内面から理解し、個人史と社会史の連動関係を把握するライフヒストリー法を用いた。当事者の主観的な意味世界のなかで、模型航空教育がどのように受容されたのかを捉えていった。さらに、教育の影響を受けつつ、相対的に自律した文化実践として、学校空間

を離れた模型製作がどのように行われていたのかという点についても聞き取りを行った。

#### 【結論・考察】（４００字程度）

以上、文献と語りという２つの側面からの分析結果を総合することで、戦時下における少年文化の形成過程を分析していった。そのうえで、分析結果を、すでにこれまでの研究で明らかになってきた戦前期における科学や鉄道を中心とした少年文化や、戦後におけるプラモデルや戦記物などの大衆文化研究の知見と合わせて考察した。

考察の結果として、戦時下の帝国日本をめぐる理念や物質的欠乏、模型教育という制度、さらにモノとの身体的な関わりから、日本の模型が、欧米の Model Kit や Miniature とは異なるように形成されてきた過程がわかった。また、戦中に登場した「兵器模型」から、戦後のスケールモデル／プラモデルへの連続性と変化が明らかになった。さらにそれは、ポスト戦後期から現在に至る「ガンプラ」などのキャラクターモデルにおいても依然として「兵器」的な要素が多いことにも、繋がっているだろう。

本助成を含む関連研究の成果に関しては、2017 年度内に出版予定の単著『模型のメディア論』のなかで公表する予定である。